

世界株指数、日本株3銘柄減少 米ハイテク株存在感

2025/8/9付 | 日本経済新聞 朝刊

株価指数算出大手の米MSCIは7日（日本時間8日早朝）、代表的な全世界株指数「MSCIオール・カンントリー・ワールド・インデックス（ACWI）」の組み入れ銘柄を見直し、日本株を3銘柄減らすと発表した。米国株などと比べて株価の伸びが鈍かったことが主因だ。市場では米ハイテク株の存在感がかつてなく高まり、アクティブ運用者からは苦悩も聞かれる。

ACWIは先進国や新興国ごとのスタンダード指数（大型、中型株が対象）で構成する指数で、世界株の時価総額の85%をカバーする。MSCIはドルベースの時価総額順や株式の流動性なども踏まえ、四半期ごとに定期的に見直す。今回の銘柄入れ替えは26日の取引終了時点で反映される。

新たに採用されたのは、[川崎重工業](#)と[良品計画](#)の2銘柄。除外されたのは[電通グループ](#)、[ホシザキ](#)、[オムロン](#)、[小野薬品工業](#)、[リコー](#)の5社。差し引きで日本株の組み入れ数は3減り、全体で180になった。

MSCIが算出する株式指数は世界の機関投資家にとり標準的な運用指標だ。連動するパッシブ運用額は莫大で銘柄の採否は個別株の需給に大きな影響を与える。大和証券の橋本純一チーフクオンツアナリストは今回の入れ替えで日本株には約600億円の機械的な資金流出が生じるとみる。

減少に転じたのは2四半期ぶり。1年前と比べると18社（9%）少ない。要因について、SMBCE日興証券の吉田隼人シニアクオンツアナリストは「円安・ドル高の進行でドルベースの時価総額が目減りしたことにくわえ、ハイテクを中心とした米国の大型株に偏重が進み、日本株がはじき出された」と指摘する。

米株高で、欧州や中国なども組み入れ銘柄数が減少し、世界全体では14減った。前回の指数更新日の5月30日以降の株価は、米ハイテク株7社の「マグニフィセント7（M7）」指数（時価総額加重平均）は14%高だったのに対し、日経平均株価は10%高、欧州株指数のSTOXX600は0.4%安だ。

市場では米ハイテク株の比重が増している。ACWIの時価総額構成比をみると、エヌビディア1社で5.1%（7月31日時点）と、日本株（4.7%）を上回る。またM7全体では米国を除く日本、英国、中国など比率上位8カ国と同等だ。

米国株ファンドを運用する和キャピタルの村松一之運用本部部長は「株価の上昇に業績がついてきており、米ハイテク株の偏重はこれからも続く」とみる。

市場における株価の偏重に、市場平均より高い成績を目指すアクティブ運用を行うファンドマネジャーは悩ましがた。ベンチマークにM7が与える影響が大きく、「運用者はM7を持たざるを得ない状況」（ピクテ・ジャパンの糸島孝俊シニア・ストラテジスト）で、独自性を出すことが難しくなっているためだ。

日本で公的年金を運用する年金積立金管理運用独立行政法人（GPIF）もアクティブ運用における収益獲得で苦戦している。足元でアクティブファンド数を増やして分散効果を高めたり、GPIFの資産全体でポジションの偏りが生じないように工夫したりするが、24年度の収益率は運用の基本としているMSCI社の指数を下回った。

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.